

## ドーム建設総括

この文章は、かれこれ三十年前に私が「ドームハウス」という円形の建物を「組織的」に建設しようと、メンバーにならった時の記録である。とにかく「息が合わない」人たちで、チームワークが悪いので非常にやり難かつた記憶がある。過大な意味付与がちょっと哀愁を誘う言い回しになつてしているのは、時代性ということでのご容赦願いたい。

### はじめに

今回のドーム建設は、党建設における外延的発展を志向するものとしてありながら、同時に活動家相互の団結の形成をかちとする位置において、党の内延的発展をおしあかっていくものとしてあつた。つまり戦略的意思結集を場所的環境の整備をつうじつかみとつていくという党的な位置付けにもあるように、物質的・実践的な発展を目指していくと同時に、組織的共同主觀の形成をつうじ内容的な発展を目指していくことが主要な課題な

のである。

一挙的な資金の集中による土地の取得からはじまり、最小の業者への委託以外は基礎・立ち上げ・外装・内装とすべて自力でやりきるというこの成果は、一昨年の三里塚横堀団結の砦建設を頂点とするわれわれの技能的蓄積の成果であり、その力量は戦旗派全党全軍の共同性のうちに培われたことをはつきりと確認しようではないか。

その場合の共同性、いわゆる組織内団結とは組織構成員同士がただ共同して任務を実践していくのではなく、その実践をつうじ活動家相互の内容的向上をかちとるというかかわりによって貫徹されていくものである。能力のある少數の精鋭が課題を担っていくのではない、それこそどこにでもいる普通の人間が一つの課題のもとに共同で闘うことこそが重要なのである。そしてその過程をつうじ、総体としての力量の向上がおしはかられていくのであり、自己実現ではなく組織的実現を通じた普遍的人間への前進という構造をつかみとることが重要である。

党的団結の形成をなし、全党全軍の打って一丸となつた共同性のもとにドームを完成させたことについては、この間の確認でも明らかになつたと思うが、本稿においてはそういう結果のうえに立ちつつも、建設過程において現出した問題点、課題性を俎上にのせ、更なる飛躍の糧とすべく総括作業をおこなつていきたい。なかでも自分自身における関わりの不充分性により現出した問題も少なくないわけであり、より深化した反省をもつて主体的に取り組んでいきたいと思う。

## 一、ドーム建設の経緯

ドームの建設は、夏期合宿終了後の八月末を期に開始された。当初を振り返ってみると、自分自身とにかく無我夢中で、何も分からぬけれど一生懸命やるだけといった意識であつたように思う。炎天下の穴掘りや基礎コンクリートの工事はたしかに苦しかった、しかし労働の対象化というか日に日に目に見えて建物ができあがっていく過程は、そんな不安をふきはらうかのような新鮮な感動を与えてくれる。むかしマルクスは人間と自然との物質代謝を説いたが、まさにそこでは文字通りの自然への働きかけを実感できたと思うのである。つまり数十人が建物の上に昇り、それこそ釘を何百本と打ちまくった野地板はりや、「ローリングタワー」という乗り物を駆使しての断熱材・内装パネル打ちなど、全党の同士諸君の圧倒的な協力のもとにこれらの過程を共同して担いきり、実践できたことは自分自身における最高の体験だったと思うのだ。ブルジョア社会的な被搾取対象としての疎外された労働からの止揚された地平として、解放的で生き生きとした労働の実践を体験することができたのであった。

しかし建物ができあがつてくればくるほど、ただ頑張るというような決意一般では続かなくなつていく。建物の骨格的な形ができるがつてくると当然技術的な要素が要請されるようになつてくるのだが、とくに屋根はりの工程は外観の見栄えだけでなく雨漏りを防ぐ意味でも重要な工程である。水切りの付け方、ルーフィングと呼ばれる下地材の張り方など、特に念入りに意志統一を行つたのであるが、防水のため晴天のときしかできないことや、形状が特異なだけに整然と模様をつけていくことがなかなかできず、かなり日程的にも苦しい鬭いを強い

られることになった。全工程を通じて山場を上げると一つにはこの屋根はりがはいるのではないかと思う。特に上に上がれば上がるほど足場の確保が困難になり、ほとんどノンザイルのクライミングのような体験をしたのには本当にまいってしまった。最後にハーネスやザイルの使用が言われるようになつたが、落ちそうになることもしばしばあり、その度ごとに肝を冷やすおもいであった。

そしてもう一つの山場として内装工事、なかでも塗装の過程を上げることができるだろう。内装工事と外装工事の違いはなんといっても作業自身の正確さの違いである。外装工事の仕上げが外に面しているのに対しても内装のそれは直接居住空間に面しているということ、つまりそれだけ念入りに仕上げが必要なのであった。

塗装に際してはまず徹底的なパテ埋めから始まる。ボードとボードのつなぎ目だけでもゆうに二百箇所以上あり、そのうえ壁面の角なども加えるとそれこそ気の遠くなる箇所を埋めていくわけであるから、とにかく根気のいる作業であることにはまちがいない。屋根はりのような作業自体の困難性はないにしても、絶対的時間の制約によつてどうしても深夜までの作業になる以外なかつたのである。この点についてはあとで総括していくこうとおもうが、延々と続く作業工程のなかで皆かなり消耗していた。

パテうめが終わるときは養生といって塗装面でないところをペンキがつかないようにシートでおおう工程である。大きく分ければ壁面と床面とを塗りわけるということになるわけであるが、実際はそんなに簡単にいかないわけであつて窓枠とか塗りわける際の部分などはかなり慎重に養生していかなければならず、ここでもかなり時間の消費をしいられたわけである。

しかし実際の塗装は正味三日、いかに準備の段階が重要であるかが実感できた。つまり実際の塗装は準備さえしつかりできていれば工程自身は単純なのであり、すべては塗装する前に終わっているといつても過言ではないと思う。

三ヶ月間の日程を、すべての工程についていちいち説明しているわけにはいかないが、以上が大枠的な経緯ということになる。総じて感想としては、先にも書いたが党としての共同性を実感できたということである。建設に参加した同志の中には、経験を蓄積した人も少なからずいるのであるが、私も含めて「かなづちにさわるのも始めて」という人が大半だったのである。しかしそのような状態でもお互いが助け合いながらドームを完成させたということを見るのでなければならない。そこではドームの完成という明確な目的意識と、そこでの団結の形に勝利し、うつて一丸となつた総力戦によってドームをつくりあげたのである。

ア・ブリオリに完成した主体などないのは当然であるが、経験を学び主体化することによって前進していく主体——勿論、党総体としての共同主観を前提にした上での主体性ということであるが——のありようこそ、ドーム建設における勝利の根拠であるということなのである。ゆえにこの勝利は戦旗・共産同総体としての力量性の勝利であり、谷原改築から本部ビル建設、そして三里塚横堀団結の皆建設に示される、われわれの内容的前进を刻印するものであるのだが、その反面、実践としての総括は、再認識をつうじた更なる飛躍をわれわれに要請しているのであり、「勝った勝った」と浮かれていても実際上の飛躍には結実していかないのである。われわれは、今回のドーム建設の勝利の地平をさらに押し上げていくためにも、具体的な問題点を俎上にのせ、対自化の作業を進めていきたいと思う。

## 一、総括すべき問題点

今回のドーム建設は体力的にもさることながら技術的にも未知の領域が多く、当初われわれは会議を毎日行い意志統一の強化をかち取りながら工程を進めていくという方針をとつていった。そこでは技術的な方法論以上に団結と共同性を問題にし、『戦旗』の読み合わせや『ブレチン』の討論などを精力的に行っていったのであった。

つまりわれわれは「ドームビルダー」であるまえに革命家なのである。当然ギルドのような封建的集団でもないわけであるし、ましてや「何とか工務店」といったブルジョア企業ともちがうのであり、党的前進の物質化としてこの「事業」を担っているにすぎないのである。その意味では建築家にだつてなるし、ありとあらゆることを担えるようになるのである。しかし建築家になればおのずと今まで以上に戦旗派としての内容性が問われるわけであり、それを保障するものとして、会議が位置づいていたのである。

たとえばA同志の服装問題というのが討論になつたことがある。昼休みに作業服が汚れたまま昼食に帰ってきたA同志にたいして、B同志が着替えて食べるよういうながしたところ、A同志が感情的になつてしまい、食事もとらずに現場に帰つてしまつたというものであるが、なにが問題なののかというとA同志の服装については再三今までにも指摘されており、その事象自身が取り沙汰される問題なのではなく、B同志のA同志に対する提起の仕方と、A同志の対処の仕方が主要な問題であった。

すなわちB同志の提起は極めて行政的、命令的なものであつて、A同志との団結をどの様に作つていくのかと

いう観点を喪失したものであつたといえるし、A同志の対処は命令に対する感性的反発であつてB同志同様の陥  
罪におちいついたのである。つまりチームとしての団結をどのようにつくっていくのかという観点が両者とも喪  
失してしまつていたことがここにおける主要な問題だったのである。このように実際の作業によつて生起する問  
題点を討論し、強固な共同主觀をつくっていくことが当初から目指されており、またそれによつて一定の成果も  
あげていくことができたのであつた。

しかし実際工程がきつくなつてくるに従い、そんな余裕も次第になくなつてきた。会議は連日深夜にまで及び、  
そこでは技術的な問題がいつのまにか会議の重要な問題になつたり、そこで論争がついに感情的な言い争いに  
なつたりするといふこともしばしばであった。このような内容の媒介されない構造においては、いくら共同して  
物質化していくなる確認を取ろうとも、結局最後には個人の責任性において貫徹していく以外なく、組織的團  
結はおろか、建設過程そのものにも支障が生じかねない危険も孕まれていたのである。「これではブルジョア社会  
の技術者集団や、ギルド的な職人と基本的には変わらなくなつてしまふではないか。」といった危惧は当然だれ  
もが感じていた。

しかしそういった傾向に対し、価値観上では否定しつつも内容的に関われない主体のありようもまた問題であ  
つた。つまり一言でいえば技術者の言い争いに対し「うんざり」してしまい、内容的に関わることを自ら閉ざし  
てしまうのである。これでは前提的にいつて団結などかちとられるはずもなく、この傾向の延長上には個人としての自己定立といったアトミズム的主体が待つてゐるだけである。そしてこの「うんざり」してしまつた主体が私自身なのであるが、なぜそのような局面において無責任というほかない対処をとつていつたのかについて、ここで  
とらえかえしておきたいと思う。

具体的に見れば、とかく技術的な傾向になるA同志とB同志との論争がそもそもものきつかけである。論争とい

つても実際はささいな工程をめぐっての対立なのであるが、作業中・会議中を問わず繰り広げられる口論に、はつきりいって聞いている方はしらけてしまうという雰囲気であった。しかも両者ともプロジェクトの指導的な主体であり、だからこそ論争にもなるという一面をももつのであるが、いずれにせよ自分としては当初提起された内容的保障の不充分という現状も手伝って、不安ならぬ不満を感じていたのである。

本来的にはそういういた傾向に対して、A同志とB同志の在り方自身を批判するべきだったと思うが、実際はそれができなかつたのである。なぜかといえば当時の私はただ上級の言われた通りに実践するという価値観をもつており、「私が□をだすのはおこがましい」などと考えていたのである。

つまり下部主義的な自分という問題があきらかに存在しているにもかかわらず、そういういた問題がそもそも切開されず、形式や予定通りに進行しないことにのみ腹を立てていたといえる。抽象的理想からすべてを推し量つて結果を解釈する、倫理主義的傾向として当時私は存在したのである。そのような自分自身の傾向は、なにもドーム建設の過程で現出した問題ではなかつた。たとえば夏期の全党的に取り組まれた論文作業の過程でもその傾向は存在したのである。

すなわち私は初期マルクスの研究をライフワークとして設定しており、「『ドイツ・イデオロギー』ノート」という形でまとめたのであるが、当時の私は自分の研究の成果にすっかり満足し、「これこそ真理だ」などと勝手に思念することをもつてマルクス教条的な論文を提出したのである。一言でいえば理論主義的傾向の陥穰なのであるが、そこでは学習によつて一定の理論的深化がかち取られたことをもつて、それを実際の階級攻防のなかで生かしていくことができず、あたかも絶対者の如く「死んだ教条」を振り回していたと言える。

理論が一人歩きして革命を達成させるわけではなく、あくまでもそれを担うのは現実の社会に定立する実践者としてのわれわれであり、その場合の理論とは革命的実践における武器なのである。つまり現実に起ころる階級

的矛盾をマルクス主義的にどう位置付けていくのかといった自らの価値観をつちかうものとしてそこでの理論はあり、そうであるがゆえにドグマとしての教条的マルクス理解を退け、ブルジョア的な自己がマルクス主義的価値観を獲得し、成長していく過程での「導きの糸」として理論学習を行っていくことが求められたはずであった。

しかしそれが理解できなかつたのは、当時、自分が抱いていた強固な問題意識に規定されていたためであつた。この課題にはいる前は、「理論など関係ない。実践によって主体は形成される。」というように本当に考えていたし、实际上自分自身の主体形成の内実は革命的実践における経験の蓄積に規定されていたのである。しかしここで転機がおとされた。今まで理論など関係なく、ひたすら実践によって革命家たらんと奮闘してきた自分が、なぜ鬭うのかと問われ、それに対して確信をもつて言い切れる内容をもつていなことを理解するに及んで、以降いささか強引にイデオロギーの主体化に取り組んだのである。「理論は必要ないなどと言い切れるものではなく、理論と実践は統一されるべきではないのか。」ここにおける問題意識が当時自分が設定したテーマであった。

そこでは今まで自分がつちかってきた、革命運動への関わりにおける価値観の全否定としての「マルクス主義的価値観」なるものの指定と、その価値観への到達が課題とされ、実践とはまるで乖離した「主体性とはなにか」という問題意識に呪縛されながら学習が学習として一人歩きしてしまったのである。

論文全体を通じての展開は、いずれもそういった問題意識のもとに取り組まれた作業であつて、本質的には「こうあらねばならない」とか「かくすべき」という結論にしかなり得ないことはおのずと明らかであつた。つまりマルクスが「哲学者達は世界をただ解釈してきただけ」というヘーゲル左派に対しあこなつた批判をそれとして理解しながらも、本質的にはその陥穀に落ち込んでしまつてゐたのだ。

そういった夏期論文の総括もそこそこに、ドーム建設に入つていつたことが問題ではあるのだが、いずれにしても当時そういった傾向に対し、それを自覚していなかつた訳ではなく、本質的にはその自覚さえもが観念的だ

つたことが一番の問題であった。これはもう一方の陥穽である下部主義的傾向の問題とも関連してくるのであるが、理想に対する現実のギャップという事態を自分で受け止められない、言葉を変えれば事象に対しても責任を負いきれない主体ということができる。

先にも触れたが、塗装の工程の際にスケジュール上真夜中までの作業を余儀なくされ、延々とパテ埋めをおこなった訳であるが、私は即時的な意識からこのような方針に否定的であった。たしかに戦力の集中および合理性という観点からいって当時の方針は、疲労による体力の低下などを考えられなかつたという点において、総括せねばならないと感じている。しかしながらよりも問題なのは、それに対する私の態度であった。そこでは全く没主体的に「展望なき苦行」のような印象を持っていたのである。

形態的には個としての即時的反発や疲労から無気力感に陥り、無言で作業することが多くなつていった。人間関係的にもぎくしゃくしたものになつていき、観念の上での有機的関係性と、現実のあまりにもおおきなギャップのなかで、相乗効果での不満がさらにつのっていく。本来はブルジョア社会的諸関係における残業であるとか、時間外勤務という概念そのものを価値観上止揚していこうとしているにもかかわらず、実存においてはそういった状況のなかで不斷に疎外感におちいり、ブルジョア意識を再生産しつづけていたのである。しかもそういう状況をなんとか打破していくこうという嘗為すら喪失してしまつていたのだ。

つまり自分にとつてのドーム建設というものが、当時「与えられた任務」以上の枠を出なかつたということであるが、党を建設するということを党に帰属するという観点からのみとらえており、主体的、積極的に党を創造していくという思考をしなかつたことが捉え返されなければならないと思う。

ブルジョア社会的な人間関係にあっては家族、友人、地域といったごく限られた場合をのぞいては金銭の授受に基づく、機能的な関係をしか構築できないといえる。ブルジョア社会が階級社会であれば当然ともいえるが、

そういうた社会的諸関係のなかで自己形成してきた私にとって、たとえば企業という組織に属するということは自分の生活資料を得るための関わり以上ではなかったわけである。しかし革命党に結集し、そういうた社会を止揚していくこうという志向性をもてば、自分自身の組織にたいする関わりも当然変えていかねばならなくなつてくる。そこで主体的な組織への関わりを価値観上で構築していくこうとなつていくのであるが、実際上はブルジョア社会的な関わりの単純裏返しとして、党に帰属していくことのみに収斂されていつてしまうのである。

確かに結集して一、二年はそういうたとにかく頑張るみたいな構えは必要であると思うが、早晚義務意識からの息苦しさみたいなものを感じしていくことにしかならなくなつてしまふのである。ゆえにみずからが有機的に組織の実態を構成し、主体的な営為のもとに組織を創造していくという内実がそこではどうえられねばならないと思うし、そこでの人間関係も他者を見いだし、教え、教えられていくというつらなりのなかに始めて構築されるということを見ておかなければならぬと思つてゐる。

私自身の組織への関わりは観念や志向性においては妥当なもの、当為なものを思念しているにもかかわらず、実際の実存においてはまだ前近代的な関わりをしか構築しえていなかつたといえる。今回のドーム建設においてはそういうた自分自身の過渡性、限界性が改めてつきだされたわけであり、それをふまえ新たな実践のなかで克服の方途をきりひらいていきたいと思つてゐる。

### 三、結語として

三ヶ月にわたるドーム建設もなんとか一段落し、学習会などさまざまな用途でドームを活用できるようになってきた。これは内容的な深化と闘う気概を、強力な意思統一のものとで実践できるような環境が整備されたということを意味するものであり、全党全軍がうって一丸となつた闘いを構築することができる物理的、思想的根拠となるものである。

現在日帝自民党政権は、PKO法案の成立を野党の屈伏を引き出しながら押し進めんとしている。こういった情勢の基調をなすものは、八九年事態をへてスターリン主義の全面的な破産と没落が周知の事実になるにおよんで、帝国主義の世界戦略も以前的な「対ソ冷戦」構造がとりはらわれ、より露骨な形での対第三世界侵略反革命＝「世界新秩序」の全面化として現れているのである。日帝のPKO参加は、そういった帝国主義列強の政策転換に対し「バスに乗り遅れない」ための死活的課題である。

ゆえにわれわれに求められるのは、追い詰められた日帝自民党政権の打倒を広範な諸戦線の仲間とともに実現していくことであり、九〇年代戦略の物質化としての潮流の形成をなんとしてもやりきつていくことである。

スターリン主義の敗北の歴史的な根拠である、ブルジョアイデオロギーによる共産主義運動の不斷なる動搖をわれわれが主体的に受け止め、みずからの問題として乗り越えていけるのかが真に問われている。十八世紀に登場した巨大なる資本主義を前にあくまでもそれにたちむかつたマルクスの闘いをわれわれは知っているし、そういふたマルクスの営為をみずからのもとのとすべく闘う主体を「歴史としての今」は要請しているのだ。

壮大なる歴史を画した事業を、我と我が身をもつて実現するためには真紅の戦旗と丸いドームのもと徹底抗戦で闘い抜こうではないか。最後にマルクスの引用をもつて結語に変えていきたい。「従来の共同社会の代用物、すなわち国家等々においては、人格的自由は支配階級の生活諸関係のうちでそだつた諸個人にのみ、そしてまさにかれらがこの階級に属する諸個人であつたかぎりにおいてのみ存在したにすぎない。…眞の共同性社会においては、諸個人はかれらの連帶のうちで、また連帶をとおして同時にかれらの自由を獲得する。」自由を求め共に闘わん！

## ドーム建設の位置

- 1 組織内会議の場所的確保。時間に制約されずに充分に討論ができる環境を整備することにより、戦略的な理解やイデオロギー性の向上をめざす。
- 2 組織的宿泊能力の向上。本部における潜在的収容力の向上をはかり、戦時こうたん性を高める。
- 3 それらの整備をつうじ、合宿、組織内学習会、会議の遂行を可能とする体制を整え、地方との交流、意志統一の高次化をめざす。
- 4 会議、学習会××人、宿泊×人、戦時宿泊××人の収容力を形成する。
- 5 駐車場、車で×台、バイクは××台の駐車を可能とする条件をつくる。